論　説

ヴァーチャスパティの年代論

金　沢　　篤

東洋学報

はじめに

「インド文学史において与えられているすべての年代は，再び打倒されるために立てられたボウリングのピンである[1]」という W. D. Whitney のことばは今もなお切実なものである。労苦の果てに一人の思想家の生存年代について一つの説が立てられる。様々な角度からの検証をクリアして大方の支持が仮りに得られたとしても，新たに発見された史料によって覆されることがよくある。そしてまた新説が提出される。行きつ戻りつして，結局は前進することになるのだろうか。

さて，インド思想史上の巨人シャンカラ (Śaṅkara) は，ヴェーダーンタ学派の根本経典『ブラフマスートラ』(Brahmasūtra) に大部の注釈書を著わして独自の不二一元論を確立したことで知られている。その Śaṅkara の注釈書に，重要な副注『バーマティー』(Bhāmatī) を著わしたのが，ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspatimiśra: 以下 Vācaspati と略称) である。

本稿ではその年代をめぐってなされた諸研究の一端を紹介し，現在流布する年代論が抱えている問題点を探ってみたい[2]。

I. Vācaspatimiśra の人と作品

Bhāmatī の著者たる Vācaspati の作品としては，以下のものがある。

イ）Nyāyakaṇikā (NK)

ロ） Tattvasamīkṣā (TS)
ハ） Tattvabindu (TB)
ニ） Nyāyavārttikatātparyaṭīkā (NVTT)
ホ） Tattvakaumudī (TK)
ヘ） Tattvavaiśāradī (TV)
ト） Bhāmatī (BM)

これらの作品は，いずれもBMの著者たるVācaspatiの真作として異論なく認められているものである。マンダナ・ミシュラ(Maṇḍana-miśra）の『ブラフマシッディ』(Brahmasiddhi) に対する注釈書と考えられる，したがってヴェーダーンタ学派の著作と考えられるロ)を除いて全て現存し，刊行されている。イ)ハ)はミーマーンサー学派，ニ)はニヤーヤ（正理）学派，ホ)はサーンキヤ（数論）学派，ヘ)はヨーガ学派，ト)はヴェーダーンタ学派の著作としていずれも各学派の学説史において重要視されているものである。このことが，Vācaspati に対していつからか与えられた「一切の教説を自らの教説とする者」(sarvatantrasvatantra[3]) という称号に如実に反映していると見做すことが出来る。また，上記の著作中には，その制作年代や著者の生存年代を直接指示する記述は見られない。著作順は，各著作中に現れる他の著作への言及事実等に基づいて，今日では概ね上に掲げた順であろうと推定されている[4]。それは，最後の著作と考えられる BM の以下のコロホン中の記述に呼応するものである。

i） yan nyāyakaṇikātattvasamīkṣātattvabindubhiḥ / yan nyāyasāṃkhyayogānāṃ vedāntānāṃ nibandhanaiḥ //3 samacaiṣaṃ mahatpuṇyaṃ tatphalaṃ puṣkalaṃ mayā / samarpitam athaitena prīyatāṃ parameśvaraḥ //4 (BM, p. 1020, ll. 19-22)

1） 「『ニヤーヤカニカー』と『タットヴァサミークシャー』と『タットヴァビンドゥ』とにより　正理と数論とヨーガとヴェーダーンタに関する著述により　予は大功徳を積めり。此(の功徳)の大なる果報を　予は(神に)捧ぐ。よって至上神これを嘉し給え」(金倉，p. 277, ll. 7-10)

この他に『ニヤーヤスーチーニバンダ』(Nyāyasūcīnibandha) という特異な著作[5]があり，やはり Vācaspati の名前が冠されている。それは，著者の独自の思想や哲学上の議論が展開されているものではなく，『ニヤーヤスートラ』(Nyāyasūtra)の各スートラを順に並べて，簡単な解説を付したものである。いわばスートラ・パータ (sūtra-pāṭha) と称すべきものであり，したがって上記の諸作品と同列に並べられるべきものではない。だが，Vācaspati の年代を問題にするに当っては，見過ごしに出来ないものがあり，実のところ，これまでの数ある Vācaspati の年代論で，最も多用されてきた史料と言える。と言うのも，そのコロホンには，Vācaspati の名前と共に，他の作品には見られない年代についての明記があるためである。

ii.) nyāyasūcīnibandho 'sāv akāri sudhiyāṃ mude / śrīvācaspatimiśreṇa vasvaṅkavasuvatsare //3// (NSN, p. 20, ll. 24-25)

2) 「この『ニヤーヤスーチーニバンダ』はヴァーチャスパティ・ミシラによりて敬虔心に満ちたる悦びにおいて八九八年に作られたり」(金倉，p. 262, ll. 8-11)

ここに現れる vasv-aṅka-vasu-vatsare という複合語は，898 年という年代を意味すると考えられ[6]，それによって NSN が Vācaspati によって 898 年に作られたことが知られる。この NSN が，上記の諸作品の著者たる Vācaspati と同一の Vācaspati によって作られたと考え得る者は，これによって Vācaspati の年代を推定する重要な手掛かりを得たことになる。だが，その場合にも，その 898 年がいかなる 898 年であるかという次の問題に直面せざるを得ない。現に，これまでの Vācaspati の年代論は，年代を表わすその数字の解釈をめぐって展開されたとまで言えるのである。以下にはその点を問題にするが，その前に，先に見た BM のコロホンの末尾部，即ち結頌を引くと共に，今日 Vācaspati という人物について，明確に知られていることを列挙しておこう。これらの諸点が Vācaspati の年代論に反映していることは言うまでもない。

iii) tasmin mahīpe mahanīyakīrtau śrīmannṛge 'kāri mayā

nibandahaḥ //6 (BM, p. 1020, l. 26)

3）「かの大名声ある君主ヌリガ (Nṛga) の下にて予はこの書を作れり。」(金倉, p. 264, l. 18)

① Vācaspati の師が Trilocana という名前を持つこと[7]。

② Trilocana が Nyāyamañjarī という著作を著わしたこと[8]。

③ Vācaspati が Nṛga 王の庇護の下で BM を著わしたこと[9]。

④ Vācaspati が Uddyotakara, Śaṅkara, Maṇḍanamiśra 以後 Udayana 以前の人物であること[10]。

II. Vācaspatimiśra の年代

従来の Vācaspati の年代論は大きく二種類に分類出来る[11]。一つは, NSN を Vācaspati の真作と見なして, そのコロホン中の 898 年を中心に構成したもの, もう一つは, それに重きを置かずに, 他の史料, 主として他の思想家との先後関係に基づいて構成したものである。前者はさらに二つの立場によって分類される。一つは, NSN の制作年代を表わすその数字をヴィクラマ (Vikrama) 暦紀元[12]と解して西暦 841 年と考える立場, もう一つは, シャカ (Śaka or Śāka) 暦紀元と解して西暦 976 年と考える立場である。両者による Vācaspati の年代には単純計算して 135 年の隔たりがある。としても, Vācaspati の年代は西暦 9 世紀ないし 10 世紀となり, いずれも Vācaspati に対する他の史料に似拠して立てられた想定年代から大きく逸脱することはない。したがって, Vācaspati の年代を西暦 9 世紀ないし 10 世紀とする限りでは, NSN のコロホンの真偽を問題にする必要がないと言える。逆にこの事実が, NSN (ないしコロホン) の真偽に関する厳格な考証なしに, NSN が Vācaspati の年代論の為の資料として重宝されてきた所以とも言えよう。だが厳格に史料を取扱う立場よりすれば, このことはそう蔑ろにしてよい問題ではない。NSN という著作の性格を顧慮した上でなお, この作品を BM

などの著者たるVācaspatiに結びつけるに足る確固とした史料は見出されているとは言い難いのである[13]。

NSNのコロホンをVācaspatiの年代論の基礎に据える者にとって，奇しくもVācaspatiの師たるトリローチャナ（Trilocana）の著作と同名の『ニヤーヤマンジャリー』（Nyāyamañjarī）の著者として知られるジャヤンタ（Jayanta Bhaṭṭa）とVācaspatiとの先後関係が，重要な問題となる。というのも，現在ではJayantaの年代を西暦890年頃に特定することがかなり容易であると考えられているからである[14]。同名の作品の作者ということでTrilocana＝Jayantaと見做して直ちにJayanta → VācaspatiとしてVācaspatiの年代を設定する者も過去にはあったが，今日ではその両者を別人と見做すことが普通である[15]。したがってTrilocanaの著作はその名前のみで今日には伝わっていないことになるが，Vācaspatiの他にもそのTrilocanaの名前に言及する文献が少なからずあり[16]，また引用等を通じて回収されるその断片より彼の思想の一端までが窺えることから，VācaspatiとJayantaの先後関係を探るに当っては一層微妙な議論が展開されることになる。TrilocanaはVācaspatiの年長の同時代人と考えられるから，Vācaspatiの年代論は，JayantaとTrilocanaの先後関係についての議論として進められることにもなるのである[17]。

Vācaspati → Jayantaと解する者は，概ねNSNの伝える898年をヴィクラマ暦紀元として西暦841年とする。一方Jayanta → Vācaspatiと解する者はシャカ暦紀元として西暦976年とする。また，後者の場合，VācaspatiのNVTTに対して重要な注釈『ニヤーヤヴァールッティカタートパリヤティーカーパリシュッディ』（Nyāyavārttikatātparyaṭīkāpariśuddhi）を著わしたウダヤナ（Udayana）の年代がその別の著作『ラクシャナーヴァリー』（Lakṣaṇāvalī）のコロホンより西暦984年前後に特定出来ることから，その両者，すなわちVācaspatiとUdayanaの年代が近きに過ぎるという難点が付随すると考えられた[18]。NSNをVācaspatiの年代論の資料から除外する者がこの難から免れていることは言うまでもな

い。

以上の結果, Vācaspati の年代に関しては, およそ以下の三説に纏めることが出来る。

① 西暦 976 年説（Jayanta → Vācaspati → Udayana）
② 西暦 841 年説（Vācaspati → Jayanta → Udayana）
③(①′) 西暦 890 年～984 年説（Jayanta → Vācaspati → Udayana）

そのそれぞれの説を採る学者の代表が, 順に P. Hacker, G. Oberhammer, S. A. Srinivasan である[19]。①を採る者は, Vācaspati を Jayanta に先立つと考えるが[20], 先述した通り Vācaspati と Udayana の関係を合理的に説明する必要がある[21]。②を採る者は, Vācaspati が Jayanta に先立つか, もしくはほぼ同時代の学匠であると考える者である[22]。また③を採る者は, ①と同様 Jayanta を Vācaspati に先立つと考えるが, Vācaspati の NSN の記述に重きを置かない者[23]で, 現段階では, Vācaspati を「Jayanta 以後 Udayana 以前」と言うだけで甘んずる, いわば穏健派とも言うべき者である。素朴とも言える別の根拠に基づいていたとはいえ, かつては主流をなしていたかの観のある[24]②は今や少数説となり, 現在では①説を支持する者が優勢である[25]。それは, 関連領域での個々の著作の研究が進み, 新しい史料が収集・参照されたという学界の事情を反映したものと言うことも可能である。だがそれは, ①説派の急先鋒と目し得る D. C. Bhattacharya の詳細多岐にわたる所説が概ね妥当なものと確認され, 徐々に大方の容認するところとなってきたことに依るところが大である。今日いやしくも Vācaspati の年代に言及する者で, この Bhattacharya の研究を踏まえぬ者があるとすれば, 軽率の誹りを免れないであろう。にも拘らず, この Bhattacharya の所説を真っ向から批評した者は驚くほど少ないのである[26]。それはともかく, 後に驚くばかりの博識ぶりを示すことになった[27]この Bhattacharya の最大の功績は, NSN を西暦 976

年に著わしたVācaspatiのNVTTに対してNVTTPという副注を著わしたUdayanaが，西暦984年にLを著わしたという難点，つまり，被注釈者たるVācaspatiと注釈者たるUdayanaの年代が至近に過ぎるという難点を克服する方途を明確に示した点にある。以下にはその所説を見てみたい。

インド思想史の上で年代不詳の思想家が多い中にあって，Udayanaの年代は，その著作と考えられるL中の以下のコロホンにより，早くから明確にされていた。

iv) tarkāmbarāṅkapramiteṣv atīteṣu śakāntataḥ /
varṣeṣūdayanaś cakre subodhāṃ lakṣaṇāvalīm //
(L, colophon[28])

4) ウダヤナが，シャカ暦紀元906年に，理解しやすい『ラクシャナーヴァリー』を作れり。

tarka-ambara-aṅka-という906を意味する複合語を含むこのコロホンは，その著作Lが西暦984年にUdayanaによって作られたことを明白に示している。だが，Bhattacharyaは，このUdayanaの年代がVācaspatiを始めとする他の思想家達との先後関係から見て適当なものとは思われないこと，Lの写本にはそのコロホンを欠いているものがあること等を理由に，それはUdayanaの真作と考えられるLの正しい制作年代を表わしたものではなく，つまりtarka-ambara-aṅka-（906＝西暦984年）ではなく，本来はtarka-svara-aṅka（976＝西暦1054年）とあったかも知れない，と推定したのである[29]。LをUdayanaの偽作としたり，そのコロホンを後代の誤った付加としたりすることなく，それを巧妙に読み換えた上で，他の思想家との先後関係等との関わりでUdayanaの年代を設定し得たことが，BhattacharyaのVācaspatiの年代に関する①説に有利に働いたものと考えられる。だがやはりこのBhattacharyaのUdayanaの年代に関する所説にも厳正・慎重な学者によって疑義が提起されている[30]が，それはVācaspatiの年代にまで及ぶものではなかった。

③を明確に主張するSrinivasanは，Bhattacharyaの著書を参照

し[31]つつも，自らの領域を弁えてか，Udayana の年代に関しては旧来の通説を採用している。「Jayanta 以後 Udayana 以前」として立てられたその説は，充分に幅を持たせている点で限りなく妥当なものと見えるが，Jayanta と Vācaspati の先後関係や，Jayanta と Udayana の年代如何によっては，当然修正されるべきものとなろう。Srinivasan の議論が「博引旁証」と評価される[32]ことがあるとはいえ，その結果得られた Vācaspati の年代が，現段階では偽作かも知れない NSN のコロホンに基づいての折衷説（西暦 9-10 世紀）と同様の観を呈するというのも，学問研究の皮肉であろうか。

さて以上が Vācaspati の年代に関してなされている議論の大要である。今後は各思想家の諸著作の個別研究が一層深められて，上記の三説が修正を受けながらも淘汰されていくに相違ないと予想されたが，近年思いがけず，Vācaspati の年代に関して全く独創的な解釈を表明する者が現れたのである。従来の Vācaspati 研究においてほとんど省みられることのなかった『ニヤーヤスートラ・ウッダーラ』(Nyāyasūtra-uddhāra) という著作を Vācaspati の年代論に取り込もうとする S. Sankaranarayanan である。「BM のコロホン—新研究」"The Colophon in the Bhāmatī: A New Study"[33]と題する論文がそれである。彼の研究は，これまで無視されてきたかの観のある小著 NSūU に再度照明を与えたのみならず，やはりこれまで Vācaspati の年代論に大いに援用されたとは言い難いインド史研究の成果[34]を取り込んでの，Vācaspati の実像へ迫らんとした意欲的な試みと見做し得る。インド思想史的見地のみからすれば必ずしも有用なものではない，しかも確実な資料の発見など望むべくもない Vācaspati の個人史にまで踏み込もうとしたものであり，検討するに充分値いするものである。それは，Vācaspati の後期の著作 BM のコロホン（上引の iii）を参照）に窺える Vācaspati の庇護者たるヌリガ (Nṛga) 王に関わる論稿である。この Nṛga 王に関しては，かつて NSN の 898 年ヴィクラマ暦紀元説に立つ Gangānātha Jhā によって考究されたことがあり[35]，それ以後の Vācaspati に関わる論稿

の中で屢々敷衍してそれが紹介されることもある[36]。だが，想像の域を出ない整合性すら欠くその説は大方の支持を得るに至らず，Nṛga 王はインド史上の記録に現れる如何なる王とも同定されていないというのが実情である。つまり，Vācaspati の庇護者たる Nṛga 王は謎の人物ということであり，したがって Vācaspati の年代やその哲学学説の凡そは解明されているとしても，人物そのものとしては依然謎のままである。これまで Vācaspati の年代論が，各思想家の学説の比較研究と相互の引用・言及関係の論議を中心に思想史レヴェルで展開されてきたのも，そうした事情が反映していたと言えよう。中村元博士が「中世インド哲学史上における種々なる人物の生存年代を決定する為の基準の一つとして，極めて重要なものである[37]」と言われる通り，Vācaspati の年代確定は，可能であるとすれば，急を要するものに違いない。以下には Sankaranarayanan の新説を検討したい。

III. S. Sankaranarayanan の新説

Sankaranarayanan の研究は，やはり従来の年代論を充分に参照したものとは言えないにしても，かなり綿密なものである。従来の諸説が，NSN を Vācaspati の真作か否かにはっきりと根拠を提示し得ないままに，そのコロホンの記述に依拠することによって主に推進されてきたことを想い起す必要がある。Sankaranarayanan は，これまでほとんど Vācaspati の年代論に用いられなかった NSN と同種の著作 NSūU[38]の以下のコロホンを重視し，これまでの Vācaspati の年代論でほとんど手つかずのまま放置されてきた BM のコロホン（上引のiii)を参照）にある Nṛga 王の問題を取り上げ[39]た上で，これまで多用されてきた NSN のコロホンの年代，vasv-aṅka-vasu-vatsara (898 年＝西暦 841 ないし 976 年) を大胆にも書写の際の誤記として退ける[40]。

v）śivenorasi vidhṛtau pādau natvāpavargadau /
vyalekhi nyāyasūtrākhyaṃ caitre vasvakṣivāsave //
(NSūU, p. 420, ll. 19-20)

5）「解脱を授け給う胸にとどむる（尊き）両足尊にめでたく帰依して　正理経と称する書をヴァス・アクシ・ヴァーサヴァの二月に書きしるしたり。」（金倉，p. 279, ll. 7-8）

ここに現れる vasv-akṣi-vāsave が問題の部分である。これを Sankaranarayanan は，シャカ暦紀元 828 年（＝西暦 906 年）と解し，自らの年代論の基礎に据える。この 828 年という解読は、それ自体極めて重要な問題を含んでいると考えられるが、今しばし Sankaranarayanan に従ってその議論を窺えば，次のようになる。彼は，Vācaspati によって NVTT, NSN, NSūU というニヤーヤ学派の三著作がほぼ同時期に書き著わされたと考える。この結果 Sankaranarayanan は，Vācaspati が NK を始めとして BM に至るその著作活動の半ばにおいて，このニヤーヤ学派の三著作をいずれも西暦 906 年ころに書き著わしたとする。つまり Sankaranarayanan は，従来の NSN の 898 年ヴィクラマ暦紀元を採用しての西暦 841 年説でも，シャカ暦紀元を採用しての西暦 976 年説でもなく，NSūU の 828 年シャカ暦紀元説たる西暦 906 年説を立てるのである。これによって，Sankaranarayanan は，今日有力な Jayanta → Vācaspati → Udayana という基本ラインに抵触することなく，しかもこれまで明確に説明が与えられていない Vācaspati の庇護者の問題もまた合理的に説明することが出来ると考える。すなわち，BM のコロホン中に見出される謎の Nṛga 王の問題である。

彼の独創性は，NSūU のコロホン中の mahīpa ～ śrīman-Nṛga を Mahīpa（＝Mahīpāla）～ śrīman-nṛpa と解釈する点にある[41]。つまり，従来「王」を意味する普通名詞と解されていた mahīpa を特定の王の名前を表わす固有名詞と見なし，従来 Vācaspati の庇護者たる王の名前と解された Nṛga を「王」一般を意味する普通名詞 nṛpa の誤記とした点である。なるほどと思わせるこの狡猾な読み換えによって，Sankaranarayanan は従来の研究においては，不確かな憶測に基づく説明のみで，謎のまま放置されてきた重要な「事実」に充分納得のいく説明が与えられるとするのである。Sankaranarayanan によって Vācaspati に縁りの王（nṛpa）として明確に打ち出

された，このMahīpālaとは，ほぼ西暦912-945年に在位したと推定される北インドのプラティーハーラ（Pratīhāra）朝[42]の実在の王である。

Sankaranarayananの議論はさらに発展する[43]。彼はまた，Vācaspatiの最初期の著作NK中に現れる以下の記述中のādiśūraをādiśūkaraと読み換えることによって，同じくPratīhāra朝のĀdiśūkara（＝Ādivarāha）＝Bhoja I王（ほぼ西暦836-885年に在位）を指すと考える[44]。

vi） ... nijabhujavīryam āsthāya śūrān ādiśūro jayati, ...
(NK, p. 207, ll. 14-15)

6） …アーディ・シューラは，生来の腕の力を用いて，諸の勇者に打ち勝てり。…

さらに彼は以下のNSūUの冒頭の詩節中のMithileśvara（ミティラーの王）を，ボージャ王（Bhoja I）の息子にしてマヒーパーラ（Mahīpāla）王の父たるマヘーンドラパーラ（Mahendrapāla）王と解する[45]ことによって，Vācaspatiが，親子三代にわたってPratīhāra朝を支配したBhoja I → Mahendrapāla → Mahīpālaの三人の王に言及していると，論を展開するのである。

vii） śrīvācaspatimiśreṇa mithileśvarasūriṇā /
likhyate munimūrdhanyaśrīgotamamataṃ mahat //1
(NSūU, p. 393, ll. 4-5)

7）「ミティラーの君主の（下なる）学者聖ヴァーチャスパティ・ミシラによりて　聖賢の首位なる聖ガウタマの偉大なる学説が記述せらる。」(金倉，p. 264, ll. 4-5)

		(906 A.D.)	
Vācaspati:	NK	NSūU, NSN, NVTT	BM
	Ādiśūra	Mithileśvara	Mahīpa
	‖	‖	‖
Pratīhāra-D.:	Bhoja I	Mahendrapāla	Mahīpāla
	(c. 836-85 A.D.)		(c. 912-45 A.D.)

因みに，Sankaranarayanan が考える BM 作成時の Vācaspati の庇護者たる Mahīpāla とは，今日『カルプーラマンジャリー』(Karpūramañjarī) 等の作者として知られる詩人ラージャシェーカラ (Rājaśekhara)[46]を師とし，またその庇護者でもあった有名な王である。

以上によって明らかな通り，Sankaranarayanan の新学説とは，Vācaspati の年代論の拠り所として従来の NSN の 898 年ではなしに NSūU の 828 年を採用した上で，それと Vācaspati の著作順とそのそれぞれの著作中で触れる三種類の「王」とを巧みに結びつけることによって，Vācaspati が西暦 906 年前後に，北インドのカナウジ (Kanauj) を王都とする Pratīhāra 朝にあって活躍した人物であると帰結するものである。これは，従来の Vācaspati の年代論にあっては充分に活用されてきたとは言い難い，碑文解読等に基づく考古学的歴史研究の成果をも取り込んでの甚だ魅惑的な学説と言えるのではないか。彼は，上に見たように，NSN の 898 を 828 と，BM の nṛga を nṛpa と，NK の ādiśūra を ādiśūkara とそれぞれ読み換え，BM の mahīpa を Mahīpāla と，NK の ādiśūkara を Bhoja I と，NSūU の mithileśvara を Mahendrapāla と解釈するという甚だ危険な道を踏んでいる。確かにその何れに対しても，彼は一応最もらしく見える綿密な理由づけを行なうことを怠ってはいない[47]。だが，果たしてこの試みは成功したのであろうか。以下には，Sankaranarayanan の新学説の難点を問題にしよう。

Sankaranarayanan の説の出発点は，NSūU を Vācaspati の真作と考えることにあった。彼はこのことを自明であるかのように振る舞っている。これは，果たして可能であろうか。これを問うことは，同時にそのコロホン中に記された制作年代を吟味することでもある。Vācaspati が注釈 NVTT を付したウッディョータカラ (Uddyotakara) の手になる『ニヤーヤヴィールッティカ』(Nyāyavārttika) の刊本の編者 V. P. Dvivedī は，刊本のサンスクリット語序文でその点に触れている[48]。Dvivedī は，問題のコロホンの年代，vasv-

akṣi-vāsava を Sankaranarayanan とは全く違って，ヴィクラマ暦紀元1428年（＝西暦1371年）と解読している[49]。つまり，Sankaranarayanan が「8」を意味すると解した -vāsava を Dvivedī は「14」と解したのである。当然ながら Sankaranarayanan はこの Dvivedī の指摘を顧慮していない。さらにこの NSūU については，そのコロホンの年代をも含めて D. C. Bhattacharya が重要な指摘を行なっている[50]ことも一切省みないのである。インド思想史上の様々な年代等に関して貴重な知見を豊富に与える名著の中で，Bhattacharya は，NSūU を当然のように，BM や NSN の著者たる Vācaspati とは別の人物，すなわち今日普通には Vācaspatimiśra II[51]として知られる，西暦 15 世紀ころに Mithilā に活躍した人物の著作と考える。そして彼は，Dvivedī がそのコロホンの年代を 1428 年と解した事実に触れる一方で，今日そのコロホンと共に Vācaspati の名前を冠して NSūU として出版されて流布しているものは，実は Vācaspatimiśra II の NSūU ではなく，現代の編纂者が種々の書物を校合しての産物に過ぎないと断じている。さらに彼は，現行 NSN による NSū のスートラ数と，現行 NSūU によるスートラ数には，前者が 528，後者が 531 というように，食違いがあることを指摘している[52]。

Sankaranarayanan は自ら依拠する NSN と NSūU のスートラ数の明らかな齟齬に言及せず，後者を “the first copy of the authentic sūtrapāṭha”，前者を “a sort of its second improved edition” と見做している[53]。NSN と NSūU を NVTT の著者たる Vācaspati の真作と考え，それらを彼は自らの議論の重要な基礎に据えているのである。また，仮りにそのコロホンを含む現行 NSūU とは別の NSūU があるとしても，コロホン記載の vasv-akṣi-vāsava を 1428 と Dvivedī が解した事実に，Sankaranarayanan はどう答えるであろうか。Dvivedī 自身もそれには特別の説明を付しておらず，それに対しては本邦の金倉圓照博士も率直に疑義を表明されておられる[54]。だが，今日銘文学 (epigraphy) の常識より見て，vāsava を「14」と解する道は開かれているように見える[55]。一方，

"Vasūnām idaṃ vāsavam denotes the number 8[56]" と注記しただけで，問題の年代を 828 年と解して議論を展開した Sankaranarayanan の立脚点は，余りに弱いように思われる。彼は，同一人物 Vācaspati による同種の二著作 NSN と NSūU とが同一年に書き表わされたとし，その年代記載がそれぞれ 898 年，828 年とあることから，つまり，一位と百位の数が共通であることから，何れかが誤って書写されたと推理を展開しているのである[57]。そして他の歴史的事実と突き合わせた上で，-aṅka- は，-akṣi- の誤写であると進めている。この間の作業は，Bhattacharya が Udayana の L のコロホン記載の tarka-ambara-aṅka 中の -ambara- を -svara- と読み換えたのと同様，ある意味では鮮やかである。だが彼の学問研究としての全き不備を糾弾することも可能である。そして，Bhattacharya の指摘通り NSūU が今問題にしている Vācaspati の著作ではなく，遙かに後代に Mithilā に生存したもう一人の Vācaspatimiśra（＝Vācaspati II）の著作であるとしたら，その冒頭の詩節に記された Mithileśvara が Sankaranarayanan によって西暦 10 世紀にその王威を振るった Mahendrapāla と同定されたこと，及びその同定の為に費やされた思弁が一気に色褪せるであろう[58]。

だがこのように手読き上の完全な不備が指摘されたとしても，Sankaranarayanan によって立てられた Vācaspati の年代が無に帰すわけではない。こと年代論に関する限り，年代を割り出すための手続き・方法の不備は致命的なものではないからである。NSūU を一切引き合いに出さずとも，彼は，いわば聖域の如くこれまで遇されてきた NSN のコロホンの 898 年を，Srinivasan のように捨てることもなく，ちょうど Bhattacharya が Udayana の年代に関して読み換えを行使したように，単に 828 年の誤記と仮定した上で，Vācaspatiの年代論を起すことも出来たのである。そして，Sankaranarayanan が真に問われなければならないのは，NSN ないし NVTT の制作年代を 828 年（＝西暦 906 年）としたことが，これまで知られている Vācaspati をめぐる「事実」をよりよく説明することが本当に出来るのか，という点であろう。898 年（＝西暦 976 年）説

の一つの大きな難点と考えられたUdayanaのLの制作年代906年（＝西暦984年）との関係が至近に過ぎるという点は，それによっていくらかは打開されるように見える。またSankaranarayananは明言しないが，彼の立てるVācaspatiの生存年代は，今日Jayantaの年代として一般に想定されている西暦820-900年に概ね重なるように見える。そして，BMのコロホン中の謎のNṛgaをnṛpaと読み換え，mahīpaをほぼ年代の明らかになっているMahīpa(＝Mahīpāla)と解するアプローチと，そこから帰結されるMahīpāla王の庇護の下でVācaspatiが後期の著作BMを著わしたという想定は，文献学者が「踏むを畏れる」道を辿った結果とはいえ，案外正鵠を射ているかも知れないのである[59]。

おわりに

以上で，Vācaspatiの年代をめぐるこれまでの諸説の一端を紹介し，それらが孕む問題のいくつかについて検討を加えた。Sankaranarayananによる最新の年代論は、不備の多い、ある意味では杜撰な，常識の欠如と憶測と推断の所産とも見做し得るものである。だが，Sankaranarayanan自身も言う[60]如く，従来のVācaspatiの年代論もまた多くは正しい歴史知識の欠如という網に覆われていたものと言うことも出来るのである。広い視野に立っての確実な知識の集積として，Vācaspatiの年代とその人物像が解明される日の遠からんことを願うのは，一人筆者ばかりではあるまい。Vācaspatiの年代に関して必ずしも新しい知見をもたらすものではない覚え書きを，「Vācaspatiの年代」ではなしに「Vācaspatiの年代論」と題して敢えて提出するのも，偏にその願いに発しているのである。

(1987. 2. 16)

略号表

BM: Bhāmatī → Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya (Bombay, 1938)

JSMN: Jñānaśrīmitranibandhāvalī (ed. by A. Thakur, Patna,

1959)
L: Lakṣaṇāvalī (註(28)参照)
NK: Nyāyakaṇikā (PS 8, Varanasi, 1978)
NM: Nyāyamañjarī
NSN: Nyāyasūcīnibandha → Nyāyadarśana (ChSS 55, 1920-25)
NSū: Nyāyasūtra
NSūU: Nyāyasūtra-uddhāra → Nyāyamañjarī (KSS 106, i, 1971)
NVTT: Nyāyavārttikatātparyaṭīkā → Nyāyadarśana (Calcutta Ed., i, 1936)
NVTTP: Nyāyavārttikatātparyaṭīkāpariśuddhi
RKN: Ratnakīrtinibandhāvalī (ed. by A. Thakur, Patna, 1957)
TB: Tattvabindu
TK: Tattvakaumudī (Hamburg, 1967)
TS: Tattvasamīkṣā
TV: Tattvavaiśāradī
金倉: 金倉圓照「哲人ヴァーチャスパティ・ミシラ」『インド哲学仏教学研究〔III〕インド哲学篇 2』(春秋社 昭和 51) pp. 261-318

註

(1) 早島鏡正他著『インド思想史』(東京大学出版 昭和 57) p. 1, ll. 5-6。

(2) Vācaspati に関して，本稿と同趣旨の論稿が既に金倉圓照博士によって二度までも発表されている。それは遙かに委細を尽くし，貴重な指摘を少なからず含んでいる。したがって本稿はそれに負うところが大きい。記して甚深の謝意を表すと共に，筆者が本稿執筆中にはしなくも他界された先生のご冥福を心より念じ上げる次第である。二度目の「修補版」としての，金倉圓照「哲人ヴァーチャスパティ・ミシラ」『インド哲学仏教学研究〔III〕インド哲学篇 2』(春秋社 昭和 51) pp. 261-318 を参照されたい。

(3) この sarvatantrasvatantra という複合語の由来と本来の意味については，別稿を期す。Satis Chandra Vidyabhusana, *A History of Indian*

Logic, Delhi, etc., 1971 (1st Ed., 1920), p. 135, ll. 4-5 には "master of all systems but reliant on no one of them in particular" と訳され, Ananthan Thakur, "Vācaspatimiśra's Nyāyavārttikatātparya-ṭīkā and the Vaiśeṣika System", *Sanskrit and Indological Studies* (V. Raghavan Fest. Vol.), Delhi, 1975, p. 425, l. 9 では, "an independent writer on all the orthodox systems" と解されている。

(4) このことは, コロホン中に名前がはっきり出ている NK, TS, TB の三著作と, NVTT, TK, TV, BM に対応すると考えられ, しかもその注釈者 Amalānanda によって裏付けられる Nyāya, Sāṃkhya, Yoga 及び Vedānta の四学派名によって知られる四著作の計七著作の成立順が, 現実に伝わる TS を除く六著作の相互の言及関係に基づく成立順に概ね見合う為である (NK → TB → NVTT → TK → BM の順と, TS が NVTT に先立つこと, TV が BM に先立ち TS より後であること)。金倉, p. 280 参照。

(5) 書物の性格上 Vācaspati の真作であることを積極的に立証する証拠はない。またそれに反対する積極的な証拠も見出されないことから, 一般には真作と考えられている。Vācaspati が NVTT を著作する際に一緒に作ったものと考えられている。ただし, 最後期の著作リスト(コロホン)にも言及されないことから, BM のさらに後に作られた著作である可能性をほのめかす学者もいる。Cf. George Chemparathy, *An Indian Rational Theology: Introduction to Udayana's Nyāyakusumāñjali*, Vienna, 1972, p. 21, ll. 5-11.

(6) 銘文中の年代表記のための数字に代わり, 各種普通名詞・固有名詞が用いられたことが知られている。vasu=8, aṅka=9 であるが, さらに本稿で問題となるものに限って言えば, tarka=6, ambara=0, svara=7, akṣi=2 である。後に議論される vāsava (=14 or 8?) は不明である。Cf. D. C. Sircar, *Indian Epigraphy*, Delhi, etc., 1965, pp. 228-233. そこには, 肝腎の vāsava については言及されていないが, 「14」を表わす語として Indra 神を意味する Indra, Śakra 等が掲がっており (ibid., p. 232, l. 32), Indra の同義語として用いられる Vāsava が「14」を指す可能性はある。本稿〔付記〕を参照。

(7) trilocanagurūnnītamārgānugamanonmukhaiḥ / yathāmānaṃ yathāvastu vyākhyātam idam īdṛśam // (NVTT, p. 114, ll. 28-29) 金倉, p. 270, ll. 5-8 参照。

(8) Cf. JSMN, p. 36, ll. 3-4, p. 236, l. 16; RKN, Intro., p. 26, l. 18-19 ; etc. 金倉, p. 312, l. 11 及び註(15)参照。

(9) 本文引用 iii)&3)参照。

(10) Vācaspati が彼らの著作に注釈を著わしたという点で彼らの年代は Vācaspati の年代の上限を，Vācaspati の著作に注釈を著わしたという点で彼の年代は下限を想定する際に目安となる。

(11) これまで発表された Vācaspati の年代論はかなりの数になる。筆者が直接検分できたものはその内の極一部である。初期のもの，及び P. Hacker, G. Oberhammer, S. A. Srinivasan のものについては，金倉博士によってかなり詳しい紹介がなされている。

(12) "It (=the Vikrama era: 筆者注) is used all over Northern India, except in Bengal, where the Saka era has been generally adopted." (A. Cunningham, *Book of Indian Eras*, Calcutta, 1883, p. 47, ll. 4-5) などと一般に言われるが，確定的ではない。金倉，pp. 262-263 参照。

(13) 註(5)参照。

(14) NM の制作年代を西暦 890 年頃とする Jayanta の年代想定に際して P. Hacker がなした作業の経緯については，金倉，pp. 283-287 及び次註(15)参照。

(15) 註(8)参照。NVTT で Trilocana を師 (guru) と呼んだ Vācaspati は最初期の NK 冒頭部に以下の詩節を残している。

ajñānatimirasamanīṃ paradamanīṃ nyāyamañjarīṃ rucirām / prasavitre prabhavitre vidyātarave namo gurave //3// (NK, p. 1, ll. 14-15)

これによれば，Vācaspati の師 (guru) は Nyāyamañjarī という著作の作者ということになり，今日に伝わる同名の作品の著者たる Jayanta こそが，Vācaspati の師であると考えられ，Trilocana=Jayanta とする者もあった。P. Hacker, "Jayantabhaṭṭa und Vācaspatimiśra, ihre Zeit und ihre Bendeutung für die Chronologie des Vedānta", *Beiträge zur indischen Philologie und Altertumskunde*, W. Schubring zum 70 Geburtstag dargebracht von der deutschen Indologie, Hamburg, 1951, pp. 160-169 は，まさしくその前提の下に立てられたものであり，従って Jayanta の年代確定に主眼が置かれていると言える。だが，今日，Vācaspati の学説のうちに Jayanta の学説の直接的な影響が明確に確認出来ないこと，さらに，Trilocana の著作の断片として回収されるものが，Jayanta の現行 NM 中に見出されないこと等に基づいて，Trilocana と Jayanta は別人と見なされることが普通である。

(16) NVTT に注釈を書いた Udayana の著作，Vācaspati の学説を批判した仏教論理学者の Jñānaśrīmitra や Ratnakīrti の著作が代表的なも

のである。JSMN, RKN に付された編者 A. Thakur の Intro. 及び金倉，p. 269-274 等参照。

(17) Cf. G. Oberhammer, "Der Svābhāvika-sambandha; Ein geschichtlicher Beitrage zu Nyāya-Logik", WZKS, Bd. 7, 1964, pp. 131-181, etc. なお Oberhammer のこの論文の概要は，金倉，pp. 287-311 を参照。

(18) 金倉，pp. 262-263 等参照。

(19) P. Hacker, op. cit.; G. Oberhammer, op. cit.; S. A. Srinivasan, *Vācaspatimiśras Tattvakaumudī, Ein Beitrag zur Textkritik bei kontaminierter Uberlieferung*, Hamburg, 1967 (esp. pp. 54-65). この三論稿については金倉, pp. 282-318 を参照。ただし，その紹介文には誤植・誤解と思われるものが混入しており，読解には注意を要する。特に p. 317, l. 18-p. 318, l. 2 の一文は理解出来ない。

(20) 註(14)(15)参照。

(21) 後に触れるように，この問題に関しては，D. C. Bhattacharya が答えている。Cf. D. C. Bhattacharya, "Date of Vācaspati Miśra and Udayanācārya" (JGJhRI, 2, 1944, pp. 349-356), pp. 353ff. また，この問題を特に問題と考えない者もある。Cf. Chemparathy, op. cit., pp. 20-21.

(22) 近年発表された Jayanta の年代を扱った論文 R. D. Hedge, "Bhaṭṭa Jayanta", ABORI, 64, 1983, pp. 1-15 で，Hedge は "Thus from the sources examined above, it can be ascertained that the theory of Jayanta's priority to Vācaspati is not an admissible one." (p. 12, ll. 22-24) と言い，Vācaspati の年代に関しては西暦 841 年説を表明している (p. 14, l. 28)。なお，Jayanta の年代に関しては，P. Hacker 同様 "Thus the date of Bhaṭṭa Jayanta falls, beyond any doubt, between 820 A.D. and 900 A.D." (p. 15, ll. 34-35) と帰結している。

(23) NSN の年代に依拠しないこの説に対しては，金倉博士により「NSN を偽作と見た場合，そこに記されている八九八という年号はどう説明されるのであるか」(金倉，p. 318, ll. 2-3) という重要な問いが投げかけられている。NSN の伝える年代が概ね他の史料に基づいて想定された Vācaspati の年代と重なり合うという点こそが，逆に NSN を Vācaspati の真作とする積極的な証拠と言えるかも知れない。

(24) 例えば北インドでは年号にはヴィクラマ暦を使うのが普通であるというような理由に基づいて，西暦 841 年説を採る者もかつてはあったようである。金倉，pp. 262-263 参照。

(25) Cf. K. H. Potter, ed., *The Encyclopedia of India*, Vol. I, Delhi, 1970,

p. 148; Bimal Krishna Matilal, *Nyāya-Vaiśesika*, HIL VI-2, Wiesbaden, 1977, p. 95; etc. だが，実のところ Hedge の論稿（註(22)参照）にも窺えるように，西暦 841 年説も今日依然として根強いと言える。

(26) Chemparathy は，Bhattacharya の研究を「よい刺激」と評価した上で，後述するところの Bhattacharya による Udayana の L の読み換えの企てを「不確かな根拠」に基づくものと疑義を提出している。NSN の年代が西暦 976 年であり，L の年代が西暦 984 年であるとしても不都合はないとし，L が Udayana の最初期の作品であること，そして NSN が BM より後に成立した可能性もあることに注意を喚起している。Cf. Chemparathy, op. cit., pp. 20-21. 註(5)参照。

(27) Dineshchandra Bhattacharya, *History of Navya-Nyāya in Mithilā*, Darbhanga, 1958. この書は，これまで発表されたインドの思想家達の年代を論じた書物のうち最も刺激的なものの一つであろう。彼は，そこで Vācaspati の生れ，年代，庇護者等についても，興味深い議論を展開している。cf. ibid., pp. 22-30.

(28) コロホン所載の L 未見のため，Vidyabhusana, op. cit., p. 142, n. 1 のものを引く。筆者が参照することを得た Vidyāvācaspati Sri Sasinatha Jha, ed., *Lakṣaṇāvalī of Udayanācārya, with the Prakāśa of Bhaṭṭakesava*, Darbhanga, 1963 所載の L には，そのコロホンは含まれていない。

(29) Cf. Bhattacharya (1944), p. 353.

(30) 註(26)参照。

(31) Cf. Srinivasan, op. cit., p. 54.

(32) 金倉，p. 317, l. 18 参照。

(33) *Adyar Library Bulletin*, 49, 1985, pp. 34-61.

(34) Sankaranarayanan は，適宜 *Epigraphia Indica* を参照する他，R. C. Majumdar, ed., *History and Culture of the Indian People*, Vols. III, IV, V; H. C. Ray, *The Dynastic History of Northern India*, Vol. I 等の歴史書を援用する。これらの書物の価値について筆者の知るところはほとんど皆無である。ロミラ・ターパル『インド史 2』（みすず書房　昭和 47）pp. xviii-xix 参照。

(35) G. Jhā 編の TK の刊本（1896 年初版）のサンスクリット語序文にあると言われるが，筆者は未見。金倉，pp. 264-265 参照。

(36) Cf. S. S. Suryanarayana Sastri & Kunhan Raja, ed. & tr., *The Bhāmatī of Vācaspati ...*, Madras, 1933, Intro., p. ix; V. A. Ramaswami Sastri, ed., *Tattvabindu by Vācaspatimiśra ...*, An-

namalai, 1936, Intro. (by V. A. Ramaswami Sastri), p. 53; Ganganatha Jha, *Pūrva-Mīmāṃsā in its Sources*, Varanasi, 1964 (2nd Ed.), Appendix (by Umesha Mishra), p. 33; etc. 金倉, pp. 264-265 及び Upendra Thakur, *History of Mithila*, Darbhanga, 1956, p. 234 を見る限り，Nṛga 王との関わりで引き合いに出される Nānyadeva 王の年代に関して，前二者はともに「シャカ暦 1019 年」とすべきところを「ヴィクラマ暦 1019 年」と誤記している。また，Umesha Mishra のものは何と「西暦 1019 年」と記している。上記 U. Thakur の p. 234, n. 5 によれば，nanda (9)-indu (1)-bindu (0)-vidhu (1)-sammita-śāka-varṣa（シャカ暦）となる。特に年代に関しては「孫引き」が横行することになるので，不必要な誤解・混乱の原因となる誤記・誤植には細心の注意が必要である。さらにこの Nṛga 王については，Bhattacharya も言及しているが，不確実な伝承に基づく憶測以上のものにはなっていない。Cf. Bhattacharya (1958), pp. 24-25.

(37) 中村元『初期のヴェーダーンタ哲学』(岩波書店　昭和 25) p. 87, ll. 4-5。

(38) 金倉，pp. 263-264, 278-279 参照。

(39) Cf. Sankaranarayanan, op. cit., pp. 34-36. Sankaranarayanan は BM のコロホンを新しく解釈する際に，BM に対する Amalānanda (13 C.A.D. acc. to Sankaranarayanan) の注釈書 Kalpataru と副注 Lakṣmīnṛsiṃha の Ābhoga (Madras. Gov. O.S. 128, 1955) 及び Appayya Dīkṣita の Kalpataru-Parimala を参照・批評している。

(40) Cf. ibid., pp. 37-44.

(41) Cf. ibid., pp. 44-48. Sankaranarayanan は，読み換えと解釈に当って，それなりの理由づけを行なっている。例えば Mahīpa を Mahīpāla と解釈することの妥当性を強化すべく「エピグラフにおいて Mahīpāla を意味して，Kṣitipāla という呼称が屢々用いられる」(ibid., p. 46) ことなどに言及するが，それらは必ずしも有効とは言えまい。

(42) 註(34)の歴史書の当該箇所を参照。

(43) Cf. Sankaranarayanan, op. cit., pp. 48-53.

(44) Cf. ibid., pp. 50-53. Sankaranarayanan は p. 52, n. 2 で Ādiśūkara の方が Ādiśūra より韻律 (meter) 上適切であると言うが，その理由は明確ではない。この Ādiśūra に関しては，Bhattacharya は別様に解する。Cf. Bhattacharya (1958), p. 25.

(45) Cf. Sankaranarayanan, op. cit., pp. 48-50.

(46) Cf. ibid., p. 45; S. Konow, ed., *Rājaçekhara's Karpūra-mañjarī*, HOS

IV, Delhi, etc., 1963 (2nd Ed.), pp. 175-183.

(47) Sankaranarayanan は，当時広大な国土を誇る Pratīhāra 朝の王たる Mahendrapāla が，Vācaspati によって一属国に過ぎない Mithilā の王と呼ばれなければならなかったかの理由づけを行なっている。Cf. Sankaranarayanan, op. cit., pp. 49-50. また彼は BM 中にもう一例現れる nṛga の用例 (BM, p. 481, l. 16) についても解釈を加えている。Cf. Sankaranarayanan, op. cit., pp. 53-57. さらに彼は，G. Jhā らがかつて示した Nṛga 王についての理解の難点を論じている。Cf. ibid., pp. 57-59. 最後に彼は自らの研究の「横暴」(highhandedness) とも見える態度に釈明を付している。Cf. ibid., pp. 59-61.

(48) V. P. Dvivedī, ed., *Nyāyavārttika*, KSS 33, 1916-17, Bhūmikā, pp. 150-151. 金倉，p. 279 参照。

(49) Dvivedī, ed., op. cit., p. 150, ll. 17-18.

(50) Bhattacharya (1958), p. 147.

(51) Cf. ibid., pp. 143-158; Matilal, op. cit., p. 106; etc.

(52) Bhattacharya (1958), p. 147.

(53) Cf. Sankaranarayanan, op. cit., p. 41, ll. 3-6.

(54) 金倉; p. 279, ll. 9-14 参照。

(55) 註(6)参照。

(56) Sankaranarayanan, op. cit., p. 38, n. 3. Sankaranarayanan はここで，ただ vāsava=vasu (=8) であるという自らの解釈を表明しただけのように見える。彼はこれに基づいて NSN の vasv-aṅka-vasu-vatsara を vasv-akṣi-vasu-vatsara と読み換える。Cf. ibid., p. 44, ll. 1-3.

(57) Cf. ibid., p. 42.

(58) Bhattacharya は，Vācaspati II の箇所で，その Mithileśvara に言及している。Cf. Bhattacharya (1958), p. 147, ll. 7-8. この NSūU が Vācaspati の真作と考えられないにも拘らず，Vācaspati が Mithilā 縁りの者であることは今日ではほとんど通説としてまかり通っている。それを Bhattacharya は，"Vācaspati undoubtedly belonged to Mithilā." (ibid., p. 23, l. 12) と表現している。金倉，pp. 263-265 参照。

(59) Mahīpāla に縁りの深い Rājaśekhara に帰される作品の中に，Vācaspati の師と同名の Trilocana とその作品への言及が見られる事実は，Sankaranarayanan の仮説を支持するように見えないこともない。Cf. Vidyabhusana, op. cit., p. 134, n. 5. 金倉，p. 274 参照。また，Vācaspati の TK 中に，Rājavārttika という書物とそこからの引用が

あり（TK, p. 176, ll. 24-30），これまでそれについて様々に議論されてきたが，その著者たる Rāja を Bhoja 王（I or II）と考える説もあった。Sankaranarayanan の言う通り，Vācaspati が NK で Ādiśūra（→ Ādiśūkara＝Bhoja）に言及していることが事実だとすれば，そのことは Rājavārttika を Bhoja I の作と見做す説に有利な証拠となるかも知れない。Cf. Michel Hulin, *Sāṃkhya Literature*, HIL VI-3, Wiesbaden, 1978, p. 140. 中村前掲書，p. 90, n. 1 参照。

(60) Cf. Sankaranarayanan, op. cit., p. 60.

〔付記〕

Sankaranarayanan が「8」と解し，Dvivedī が「14」と解した NSūU のコロホン中の vasv-akṣi-vāsava の解釈に関して，本稿脱稿後，チベットの暦学に精通された山口瑞鳳博士より懇切を尽くしたご教示を賜わった。記して甚深の謝意を表したい。筆者の責任において要約するならば，それは以下の三点となる。

〔その形成に当って，インド文化の伝統の影響を無視し得ないチベットの暦学において，〕

① vasu 等の訳語と考え得る nor が「8」を意味する隠語として用いられていること。

② vāsa 等の訳語と考え得る gnas(-pa) が「14」を意味する隠語として用いられていること（天界 8＋旁生 4＋人・地獄 2＝14）。

③だが，肝腎の vāsava が「14」（ないし「8」）を意味するか否かについては，チベットの暦学研究の現状では確定できないこと。

その内②は，Sircar, loc. cit.に，「14」を意味する語として，Indra 等と共に“loka (sometimes also used to indicate 3)”と列挙され，また，George Bühler, *Indian Paleography*, New Delhi, 1980 (Reprint), p.105 に，「14」を意味する語として indra...“the (fourteen) Indras”と共に，loka ...“the (fourteen) worlds”があり，さらに B.Datta & A.N.Singh, *History of Hindu Mathematics: A Source Book*, Bombay, etc., 1962, p.56 に“14 is expressed by manu, vidyā, indra, śakra, loka, etc.”とあることと軌を一にするものであろう。またそれは，例えば，『蔵漢大辞典』三巻（北京 1985), p.2975 の，bhuvana 等に相当して「14」の隠語と見做される srid-pa の項目中に，「…天界有八…旁生有四…人趣及地獄二者…其数共有十四，故表数字 14」とあることと，対応するものであろう。だが，Indra の同義語として「14」を意味すると推定し得る vāsava という語が，「8」を意味する vasu や「14」を意味する loka (bhuvana) 等の同義語と考えられる

vāsa と同様，同一語根 vas-から導出された語であるという点は確認し得たとしても，NSūU のコロホン中にあって，それが果たして如何なる数を意味するものとして用いられたかは，依然として謎である。今後の研究に頓む他ないであろう。 (1987. 3 .14)